

# 150 のとも

— 私とあなたと金沢大学 —

## 鳥人間コンテスト初出場！ 「空猿」の挑戦

金沢大学創基百五十年自主企画の一環として、金大内のサークル「空猿」が今年七月に開催された「鳥人間コンテスト」読売テレビ主催に出場した。また八月五六日に開催された金大オープンキャンパスにおいては、「コンテスト」で実際に使用された人力飛行機を展示し、「空猿」の活動を高校生たちに紹介した。まぶしい青空の下に、人力飛行機の翼と高校生の制服が光っていた。



↑ 人力飛行機「鳥超」(とりごえ)と「空猿」代表山本達郎さん

今年「空猿」(正式名称「金沢大学鳥人間コンテスト同好会」)は「鳥人間コンテスト」に初出場を果たしたが、二〇〇七年の結成以来二年間は大会に出る事が出来なかった。結成後初挑戦となる〇八年大会は書類審査で落選、翌〇九年大会は不況のあおりをうけてコンテスト自体が中止になってしまったためだ。それだけに、今回大会に出場を決めた意義は大きかったと言えよう。「空猿」は書類審査通過後も機体改良を続けたと言う。

コンテストに出場した人力飛行機、「鳥超(とりごえ)」(上写真は「空猿」のメンバーが自力で設計・製造したもの。自主的に航空力学を学び、機体の部品は自分たちで電熱線を使って削り出した。「空猿」の現代表、山本達郎さん(二年)、「空猿」コクピット班所属、上写真は、パイロットとして「鳥超」に乗って空を飛んだ。フライトではまず「浮遊感」を感じたと言う。また、短いフライトの間にも今後の飛行機設計に関する情報を収集することを欠かさなかった。

もともとは友達に連れ添って「空猿」に入会した。しかしメンバーの飛ぶことへの熱意に惹かれ、自分も飛ぶことへの想いを強くし、パイロットに志願した。フライトの直前、プラットフォームの上で専門家によるフライト指導を受けながら、「入学時には想像もしていなかった所に自分がいる」と感じたと言う。

コンテスト当日には、「空猿」結成当時のメンバーも駆けつけ、プラットフォームの上から人力飛行機の滑空する様を見守った。プラットフォームには関係者の中でも限られた人しか立つことが出来ないが、設立時のメンバーに上ってもらえてとてもよかったと、山本さんは感慨深そうに語った。

現在も「空猿」は積極的に活動を展開。総員三四名。メンバーは主翼班・尾翼班(電装班)・コクピット班・桁班に分かれる。約束事項も設けられ、「最初は小人数だったのに、今は立派な組織として出来上がっている」(顧問の香川講師)。香川講師は「空猿」結成時から彼らの活動を見守ってきた。「飛行機を作ってたこと——これが我々にとって大きな一歩だった」と振り返る。

(文責：加藤慶)



→ 「空猿」メンバー。  
オープンキャンパスにて撮影

2012 年に向けて……

# 金大ブランドワイン誕生へ！

10月9日土曜日、【創基150年記念ワインづくりに参加しよう】という企画で、穴水の能登ワインさんにお邪魔しました。本紙Vol.1の4面で少し触れた「150記念ワイン」が、7月末に人文学類哲学研究室で催したワインの試飲会を経て、ついに実現する事になります。その一環として、今回は2012年に発売される事になる記念ワインのため、その原料となるブドウを自分たちの手で摘み取るという体験をしてきました。

当日はあいにくの天気でしたが、それでも視界いっぱい広がる一面のブドウ畑は圧巻の一言。雨合羽に軍手、収穫したブドウを入れる黄色い籠を持ち、小雨のなか黙々とブドウを収穫する集団は、今思えばやや不思議な光景だったかもしれませんが、そんなことはまったく気になりませんでした。食用のブドウとは異なり膝丈に実ったブドウを一房一房摘み取り、痛んだ粒を慎重に取り除く作業は思いのほか繊細で、あっという間に時間が過ぎ去っていました。毎年このような作業を気の遠くなるような面積分、社員4名、近隣の方10名ほどで手分けして行っているそうです。



午後からはワイン作りの工程を説明していただきました。かねてから疑問に思っていた赤ワイン・白ワインの違いや国産ワインについての豆知識を知ることができました。未成年の方々には申し訳ありませんでしたが、ワインの試飲もさせて頂きました。今回はブドウ摘み体験の一部という事で、試飲用の完成品になる前の発酵二日目のワインも飲ませていただきました。アルコール濃度は2~3%程だということで、ジュースのような味わいでした

前述のとおり、今回摘んだブドウは2012年に金沢大学創基150年記念ワインの一部となります。7月末の試飲会のとき、参加された方から「自分はもう卒業してしまうけれど、せつかくの記念に何か軌跡を残したい」という言葉がありました。今回は短い宣伝・応募期間にも関わらず、19名の方が参加して下さいました。これからも2012年に向けて、何らかの“軌跡を残す”企画を考案していこうと思うので、これを読んで少しでも興味を持っていただけたら嬉しいです。（加藤 小枝）

コラム

## 《150年って何?》

### 2. 『第四高等学校』

前回のコラムで金沢大学の源流が加賀藩種痘所にある事を紹介した。今回は、150年の歴史の中で「第四高等学校」の時代を紹介したい。

1886年、中学校令が出され、全国を五区に分けそれぞれに高等中学校が置かれることになる。ここ金沢には第四高等中学校が設置され、1894年の高等学校令で「第四高等学校」へと改称。高等学校生は帝国大学への無試験入学が原則として保障されており、エリート養成校とされていたようだ。そして創立から六十余年を経た1949年、四高は現在の新制金沢大学へと包括統合される。

四高の校舎は現在の香林坊付近にあった。学生は昼間は学業に励み放課後はマントに下駄姿で街にでていたのだらう。現在、校舎の一部は四高記念館として一般に公開されている他、シテイカレッジの授業なども行われている。歴史が感じられる赤レンガの校舎。入場無料で入ることが出来るため時間がある時には散歩がてら立ち寄ってみるのはいかがだろうか。（藤田 早紀）

総合的な学習の時間の意義を問う

## 高等学校「総合的な学習の時間」

### 先進校シンポジウム開催

金沢大学創基 150 年「講演会・シンポジウム」シリーズの一環として高等学校「総合的な学習の時間」先進校シンポジウムが 7 月 31 日、金沢大学附属高等学校にて開催された。北陸三県を中心に全国各地から教員や研究者ら約 60 名が参加した。

今回のシンポジウムは、高等学校における「総合的な学習の時間」の意味を問う重要な機会となった。金沢大学附属高校を含む 6 校が、各校での「総合的な学習の時間」における取組を紹介し、成果や課題を指摘。教育基本法の改正や学習指導要領の改訂等、学校教育をめぐる情勢が変動している中で、いかにして「総合的な学習の時間」の“学び”を作っていくかを懸命に検討する教員らの姿がうかがえた。質疑応答の時間には「総合的な学習の時間」という枠を超えて教員の在り方についての指摘もみられ、シンポジウムはその深みを増したと言えよう。

総括は関西大学総合情報学部、黒上晴夫教授。シリア滞在や大学における学生とのふれあいの経験を交えながら「総合的な学習の時間」の意義について「実社会・実生活で大切なことを知る。実社会・実生活で必要となる力を培う。教科の知識・技能を適用・応用する。」等と総括した。

(加藤 慶)



#### 「総合的な学習の時間」とは

「変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとする」科目。大きな成果を上げている学校もあるが、実際の運用は必ずしもうまくいっていない。平成 21 年の学習指導要領改訂では「総合的な学習の時間」に関する記述の拡充が見られ、より一層の充実が教育現場に求められている。

#### 金沢大学創基 150 年記念事業自主企画紹介

### 「うつ病当事者の会 U-フレンズ

### ミニコンサート」

うつ病当事者の会 U-フレンズは、医薬保健研究域精神看護学分野の教員・大学院生がサポートをしながら活動しているうつ病当事者のセルフヘルプグループです。活動は当事者主体の企画・運営をしており、自主的に集まったメンバーがうつ病の回復につながる知識の獲得や情報の共有を目的に勉強会や話し合いを行っています。

今回のミニコンサートは、音楽療法でのうつ病の回復を目指す取り組みとして企画し、創基 150 年記念事業自主企画として開催しました。奏者には、国内外の病院や被災地で癒しのハープの演奏活動を行う池田千鶴子さんをお招きしました。コンサートを出来るだけ多くの方に聞いていただきたいと考え、U-フレンズのメンバーだけではなくどなたでも参加可能としました。会場の金沢大学附属病院外来棟宝ホールには、附属病院の患者さんや職員も合わせて総勢約 160 名が来場されました。ハープの演奏には合唱や語りを取り入れられ、会場内には一体感があり、来場者のなかには涙を流す方もいらっしゃいました。さらに演奏の後にハープに直接触れる機会を設けていただき、多くの来場者がハープに触れながら池田氏と交流を深めていました。

お越しいただいた皆様、ご協力くださいました金沢大学附属病院の皆様にご感謝いたします。(代表 金沢大学医薬保健研究域 長谷川雅美)



**Q. 学生時代の思い出を聞かせてください**



医学部卒

石川県医師会会長：小森貴さん

高校時代に医師になる決意をして、それから勉強をして、合格した時は非常に嬉しかったです。同時に努力をすれば結果が得られるということも実感しました。当時教養学部は2年間で、しっかり単

位を取らなければ宝町キャンパスには行けませんでしたから、全て必修の単位を取って医学部に進みましたが、力を貸してくれた友だちのおかげだと今でも思っています。医学部に進学した後はよりいっそう真面目に勉強をしました。医学部の1年(全体でいうと3年)の後期に解剖学実習があり、当時の教授である山田むねさと氏が「お参りしてから遺体に接する」とおっしゃったのを聞いて、身のひきしまる思いがしました。その思いは現在にもつながっています。医学部の5、6年は病院にこもりますが、学生にできることは部分的で医学は奥が深いため、経験が大切です。自分にできるのか心配したこともありましたが、友だちが「こつこつ努力すれば大丈夫」と言って支えてくれました。そのおかげで乗り切ることができたし、友だちが言ったことは今でもそのとおりだ、どんな仕事にも当てはまることだと思っています。

**Q. 学生、また金沢大学に向けてのメッセージをお願いします**

医師とは常に勉強し続けるものです。私の場合は先輩や友人との語り合いが自分の支えとなったため、学生には仲間とのつきあいを大切にしてほしいと思います。今は学生と接する機会はあまりないけれど、会うたびに今の学生は礼儀正しく真面目だなという印象を受けます。ただ日本をどうするか、そのために自分がどうしなければならぬかというようなことについて、学生が語ることがかっこ悪いと思われる気がするため物足りないと感じています。しかしそうではないし、そのように語ることを大人になってもしてほしいと思っています。悩みは皆が持っているもので、完全な人間などいません。ですが、お互いはお互いの関与の中で存在するため、それぞれの結論は違っても何かをし続けるという意欲が必要なのではないでしょうか。それが前向きというものを生み出すと思っています。

(聞き手 佐渡 昌子)



M. Sato

ボランティアに応募したい方は、氏名、所属、学年、連絡先(電話番号・メールアドレス)を明記の上、FAX またはメールにてお申し込み下さい。

**創基 150 年記念事業準備委員会**

**総務部総務課総務係**

電話: 076-264-5111 FAX:076-234-4010

MAIL:[soki150@adm.kanazawa-u.ac.jp](mailto:soki150@adm.kanazawa-u.ac.jp)

編集後記  
本紙二面に掲載したワイン造りの企画が、北國新聞で取り上げられました(十月二十六日夕刊、二十七日朝刊)。綺羅、星のごとく居並ぶ金大のサークルやボランティアグループの中にあつてひと際地味なグループ150ですが、この新聞記事を読んでみると思いがけず、自分が何やらとても立派なグループの中にいるような気になせられるのは不思議なものです。聞けば記者さんも金大のOGとのこと、改めて、大学と地域のつながりを考えさせる出来事でした。(片岡 雅知)